

燕来る

森岡 正作

乗つ込みの勢のままに釣られけり
春泥の靴脱ぐ後ろめたさかな
剃りあとの顎のすべりや燕来る
かたくりの一花一花に憂ひあり
口遊ぶ歌は変わらず青き踏む
引退の馬の憩へる桜かな
鳥帰るお地藏様は西を向き

東京を

右も左も分からずに上京した私は、都会は生きてゆく為に戦う場であり、田舎は田畑を守って維持する場であるという短絡的な考えがあった。そして時に、都会で疲れた心身を自然豊かな田舎の空気が癒してくれる、その癒しの場こそ「ふるさと」と言うべきものと思っていた。

そんななかで登四郎先生の〈東京をふるさともち春惜しむ〉という句に出会い、いろいろと考える機会を与えられた。春を惜しむと言えば〈行く春を近江の人と惜しみける〉という芭蕉の句が好きであるが、先生が春を惜しむという気持ちの根底には、きっと〈春潮の遠鳴る能登を母郷とす〉という血脈の「ふるさと」があるのであろう。東京の谷中で生まれた先生ではあるが、眼差しはいつも遙か遠くを見つめているような気がするのである。